

# 守りたい、 ワンドの ゆたかな自然。

(写真 左側)  
清風学園教諭 関西大学非常勤講師  
紀平肇氏

(写真 右側)  
アクア琵琶レポーター  
梅本明美さん



上の魚はワタカです。

わたしたちが枚方市楠葉にほど近い淀川の水辺にやって来たのは午後でした。午前中の雨で増水した川の中に紀平先生は入っていきます。わたしも長靴をはいて浅瀬に入り、先生が水温や水の透明度、投網にかかる魚の種類を調べるところを見学。お話を聞きながら、魚を小網ですくったりして自然とふれあった一日でした。

「ワンドには水草帯や泥地や砂地などいろいろな環境が揃っていて、多くの水生生物の生活場所、避難場所、産卵場所になっています」と紀平先生。「淀川にすむ生物の種類のおよそ8割をワンドで見つけられるんですよ。ひとつのワンドだけでも30数種類の魚がすんでいて、魚が生きていくのにこんなにゆたかな環境はおそらく世界中探してもないと思います」

紀平先生が調査をされているのは主に桂川・宇治川・木津川の三川が合流する地点から淀川大堰(旧長柄可動堰)までの区間で、その区間には天然記念物のイタセンパラをはじめこれまでに63種類の淡水魚がみつかっています。これは全国に生息する淡水魚の種類の3分の1以上にあたると教えていただきました。淀川の河口まで範囲を広げると魚の種類は130種類くらいになるかもしれないとのことでした。すばらしいですね。

自然の宝庫、ワンドですが、大切なのはその環境を守っていくことです。特に水質保全の問題は紀平先生も力をこめてお話されました。

「水の表面だけ見えてきれいになってきたと思っても実は川底やワンド内にはゴミがたまり、ヘドロがたまってきているんです。その結果、そこにすんでいた生物が減り、それをエサとして食べていた魚も減ってきています。一枚貝も少なくなりました。川を汚さないためには、合成洗剤の使用量を減らしたり、川にゴミを捨てたりしないように、多くの方の協力をぜひお願いしたいですね」

先生が水辺をすくった小網をのぞくと、体長1センチちよつとの稚魚がたくさんびちびちとはねていました。つい最近、水草に産みつけられた卵からかえったそうです。

「川に魚などの生物がすめなくなるということは、その水を利用して私たちが安心して飲んだり使ったりできなくなってしまう。水質の問題は流域に住む人みんな考えてほしいものです」

バケツに移したかわいいうちの稚魚が泳ぐ姿を見て、その言葉を実感。ゆたかな水の風景を残していくために、わたしもできることからやっていきたいと思えました。

(梅本明美)

## 淀川のワンド

昔の淀川は水上交通路として重要な役割をもっており、たくさん舟が航行していましたが、上流から土砂が流れ出して河床が浅くなってしまいました。そこで岸から本流に向かって水制と呼ばれる突堤のような石積を数多く築いて水深を保ち水路を整えました。これは流域を洪水から守る治水も兼ねた工事だったのです。後にこの石積の間に土砂がたまり、石積と石積の間にいくつもできた池がワンドと呼ばれる空間になりました。城北ワンド群はその代表です。現在は、ワンドの数は減りましたが、水生生物の大切な生息地として積極的に保全がはかられています。